

〈図画工作〉

発想や構想の能力を育成する指導の工夫

—思いや意図を明確にしていく活動を取り入れた木版画の下絵の学習を通して(第5学年)—

石垣市立石垣小学校教諭 花 城 正 憲

I テーマ設定の理由

21世紀を切り拓く心豊かでたくましい日本人の育成を目指すという観点から60年ぶりに教育基本法が改正され、それをふまえた学習指導要領の改訂も行われた。今回の図画工作科の主な改訂の要点として、小学校学習指導要領解説図画工作編には「教科の目標では『感性を働かせながら』を加え、児童が、感性を働かせながらつくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を育成することを一層重視する。」とある。造形的な創造活動の基礎的な能力とは、具体的には、発想や構想の能力、創造的な技能、鑑賞の能力などであるが、これらの能力は小学校指導要領解説図画工作編にあるように「児童が自己との対話を重ねながら他者や社会、自然や環境などの多様な関係の中で活動することによって培われる」ことになる。このことから、思いや意図を醸成する時間や場を設定したり、活動の形態や場を工夫したりするなかで、絵や立体、工作などに表す活動を通して造形的な創造活動の基礎的な能力を伸ばしていくという意識が重要であると考えられる。

これまでの実践を振り返ると、図画工作科においては単元の目標や本時のねらいよりも作品を作る活動自体に重点を置き、発想や構想の能力、創造的な技能、鑑賞の能力などをどのように育むかという視点を欠いていたように思う。特に発想や構想を練る時間の設定や手だては十分とはいえず、活動の時間を確保したいという思いから、児童の発想や構想がまとまらないまますぐ活動に入ることもあった。それ故、思いや意図が明確になってないためか、テーマを与えても何をどう表してよいか分からず活動が進まないという児童や、妥協して適当に終わらせてしまう児童もいるというのが現状である。

木版画の学習においては、それまで木版画の授業時の課題であった児童の受動的な学習態度の改善を図るべく、平成20年度の10年経験者研修の特定課題研究で効果的な指導について検証した。研究結果として、木版画の彫りの過程に焦点を絞り、彫りの効果や彫り方がわかる教具「木版画カード」を作成し活用させることで児童が主体的に活動するようになったという成果をあげることができた。しかし、授業改善は図れたが、彫りの過程で木版画カードにある表現方法を中心にしたことから、創造的な技能の広がりを狭めたのではないかと疑問や、何よりも、デジタルカメラで撮った写真を基に下絵を描かせたことで、下絵における個々の感性豊かな発想や構想はできなかったという大きな課題が残った。

そこで、発想や構想の能力の育成を図るため、本研究では木版画の「下絵」の過程に重点を置き、下絵の過程の中で思いや意図を明確にしていく活動を取り入れた木版画の学習を展開していく。そうすることで表すことが整理され、効果的に表すための発想や構想が深まると考えるからである。具体的には、まず、学習活動のねらいを明確にしながら、それぞれの表したい場面・感情をしっかりとおさえる。次に、木版画の特性を理解し主題を焦点化させるため「ピクトグラムによる単純化」と、「クローズアップによる強調と省略」のワークをさせる。そしてこの2つの造形活動を通して学んだことと、キーワードによるウェビングで整理した「表すこと」をもとに、下絵を描いていくという流れである。

このような木版画の学習を通して発想や構想の能力を育むことができ、ひいては大事なこととあまり大事でないことを自分で判断し、試行錯誤しながらも自分の伝えたいことをはっきりさせ、効果的に伝えられる児童を育成できるのではないかと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

木版画の下絵の過程において、ピクトグラムとクローズアップのワーク(造形活動)と表すことを整理する言語活動をすることで思いや意図が明確になり、下絵に効果的に表すための構想が深められ、発想や構想の能力を育成することができるであろう。

II 研究内容

1 図画工作科で育てたい力

「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながらつくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」が図画工作科の目標である。さらに、教科の目標を受けた各学年の目標は(1)造形への関心や意欲、態度に関する目標、(2)発想や構想の能力、創造的な技能に関する目標、(3)鑑賞の能力に関する目標、の3点にまとめて示してい

る。本研究は(2)の目標に焦点を当て進めていく。

(1) 図画工作科における2つの能力（発想や構想の能力、創造的な技能）の関わり

小学校学習指導要領解説図画工作編にあるように「造形的な創造活動」とは自分の思いを形や色などで表したり、よさや美しさを感じ取ったりするなどの活動のことで、その「基礎的な能力」とはこれを実現するために必要な能力、具体的には「発想や構想」、「創造的な技能」、「鑑賞」などの能力である。その中の「発想や構想」と「創造的な技能」の関わりについて学習指導要領解説図画工作編で説明されていることを基に考えてみる。

① 発想や構想の能力とは

発想や構想の能力は「形や色、イメージなどを基に想像をふくらませたり、表したいことを考えたり、計画を立てたりするなどの能力」である。小学校学習指導要領図画工作科における指導事項では、「ア 発想や構想の能力と活動の概要」として主に表現の始まりにおける発想や構想の能力について、「イ 発想や構想の能力と活動の方法」では主に表現の過程における発想や構想の能力について表記されている。このことから、発想や構想の能力は、表現活動の初めから終わりまで持続して働くものであると考える。言い換えれば、表現力を下支えする能力とも言えるのではないだろうか。このことをふまえ、授業では、伝えたいことを表すために発想や構想することを大事にし、表現活動の中でも意図的に発想や構想する場を設定していきたい。

② 創造的な技能とは

創造的な技能は、「材料や用具を用いたり、表現方法を作り出したりするなど、自分の思いを具体的に表現する能力」である。技能であって、技術ではないということをふまえると、「自分の思いをもとに発想や構想したことを効果的に表すために、様々な表現技術を使いこなす能力」とも考えられる。

③ 2つの能力の関連性

造形遊びを除き、絵や立体、工作に表す造形活動では、一般的に発想や構想したことを基に創造的な技能を働かして具体的に表現するという活動の流れである。しかし、創造的な技能を働かしている最中に新たな発想や構想を思いつくこともあることから、2つの能力は発想や構想の能力から創造的な技能へという一方向ではなく、双方向に互いに関連しあって働く力だと捉える。

本研究では、発想や構想の能力の育成を図るが、そのみを独立して育むということではなく、2つの能力を相互に関連させて児童の資質や能力を育む学習指導を展開したい。

(2) 木版画の特性と発想や構想

版画を含めた絵を描く造形活動は、図画工作科の内容「A表現」の(2)「表したいことを絵や立体、工作に表す」で取り扱う。「表したいことを絵や立体、工作に表す」とは、感じたこと、想像したこと、見たことなどから児童が表したいことを絵や立体、工作に表すものである。(1)の「材料を基に造形遊びをする」は作品を作ることを目的としないのに対し、(2)「表したいことを絵や立体、工作に表す」ではおよそのテーマや目的を基に作品を作ろうとすることから始まる。そのため、この「表したいことを絵や立体、工作に表す」造形活動では主題を焦点化し発想や構想を深めていくことがその後の活動の重要な鍵となる。

今回は、最終的には木版に表すのだが、学習指導要領解説図画工作編には「版に表す」とは、「同じものを何枚も写し取ることができる、反転して写る、版ならではの表現効果があるなどの特徴をもった造形活動のことである」とある。

本研究で扱う木版画では、手で描くような複雑で微妙なタッチやトーンは表せないが、「手描きの表現とは違う独特の味わい」という木版画ならではの表現効果がある。彫刻刀で彫った感じをそのまま活かす方が木版画独特の表現として効果的なので、下絵は彫りやすいようにある程度単純化する。その際には表したいことがより明確に伝わるように強調したり省略したりして下絵を描くことが大事になってくるので、木版画の特性を活かせるように発想や構想させたい。また、強調と省略は、木版画のみならず、様々な絵を描く場面でも活かせることから、ワークを通してしっかり学ばせたい。

2 発想や構想の能力を育む学習指導の工夫

発想や構想の能力を育むため、木版画の制作の下絵の過程で思いや意図を明確にしていく活動を取り入れた学習を展開していく。そこでは、木版画の下絵をすぐ描かせるのではなく、(1)言語活動により思いや意図を明確にさせていく、(2)ワーク(造形活動)により木版画の特性を理解させその表し方を練習させる、という2つの活動を展開していく。(1)により、絵が苦手な児童でも何をどのよ

うに描きたいという下絵のイメージは持てるであろう。そして(2)のワークで学習したことを下絵に描く際に活用させる。たとえば思い通りに描けなくても、児童が表したいことをどういう感じに表したいかイメージをはっきり持っていれば、教師側もよりの確なアドバイスができるのではないかと考える。

(1) 言語活動による思いや意図の明確化について

滝口奉正(1993)は絵で一番大事なこととして、対象をどうとらえているかどう感じているかという「感情表現」と、その絵で何を表したいのか何が言いたいのかという「テーマ性」の2つであるとしている。本研究では「楽しい学校生活を伝えよう」という題材で木版画を作成するのだが、楽しいと思う学校生活の場面は人それぞれである。友人と遊ぶことを楽しいと感じる児童もいれば、難しい問題を解くことが楽しいと感じる児童もいるであろう。当然、出来上がる絵は楽しそうに笑っている絵もあれば、険しい表情の絵もあるかもしれない。でも、どれもその児童にとっては楽しい学校生活なのである。しかし、このような「感情表現」と「テーマ性」が絵に表れ、見る人に伝わるようにするには自分の思いや表すことを少し整理する必要がある。そこで、その手立てとして言語活動が有効であると考え、造形活動と共に進めていく。

言語活動では、思いや意図を整理するために、ワークシートに自分の思いを言葉で書いたりウェビングをしたりする。ウェビングは、日本教育技術方法体系第11巻図画工作科指導大事典(2001)にある手法を参考にする。具体的には、楽しい学校生活という言葉を中心に置き、そこから思い起こされることやものをどんどんつなげて書いてイメージを膨らませていく。その中から自分が表したい場面を選び、なぜそれが楽しい場面なのかを言葉で書かせはっきりさせる。その後、それを表すのに最低限必要なものを言葉でまたつないでいく。そのことにより児童の思いや意図が明確になっていくのではないかと考える。

(2) 造形活動による木版画の特性の理解と主題の焦点化について

① ピクトグラムによる単純化

ピクトグラム(Pictogram, ピクトグラフ Pictograph と)は、「絵文字、図表などを絵で表したもの」(パーソナルカタカナ語辞典)で、何らかの情報や注意を示すために表示される視覚記号の一つである。標識や表示などに使用され、地と図に明度差のある2色を用いて、表したい概念を単純な図として表現する。文字ではなく、視覚的な図で表現することで、内容の伝達を直感的に行う目的で使われている。(図1)

このワークでは、伝えたいものを単純化し、それ以外を排除することで伝えたいことがより明確になることを分らせるために、ピクトグラムの役割について考えさせた後、あるテーマに沿って、表したいことを単純化してピクトグラムを作らせたり、作ったピクトグラムを見せ合い何を表しているのかを互いに確認したりさせる。単純化していく過程で、表したいことを伝えるための大事な要素が何かを見分ける力が育まれると考える。

② クローズアップによる強調と省略

クローズアップとは、「写真・映画・テレビ撮影などで、対象の一部を大写しにする技法」(広辞苑)である。効果的にクローズアップすることで主張したい部分が強調され、そのほかの部分は省略されることになる。

ワークでは、まず、何が中心なのか分からない写真(写真1)、何をしているかは分かるが、クローズアップしすぎて表情等は分からない写真(写真2)、クローズアップして表情等が認識できテーマがはっきり分かる写真(写真3)の3段階の写真を用意し比較させる。それにより、クローズアップの効果について気付かせたい。その後、テーマを与え、表すのに必要なものをキーワードで絞り込ませた後に、実際に絵に描かせる。

効果的なクローズアップにより、大事なものは強調し、いらぬものを省略するということをこのワークを通して練習させ、自分の表したいことを下絵に表すことに活用させたい。



図1 非常口を表す
ピクトグラム



写真1 クローズアップ 遠



写真2 クローズアップ 近



写真3 クローズアップ 中

Ⅲ 指導の実際

- 1 題材名「木版画」～楽しい学校生活を伝えよう～
- 2 単元名 楽しい学校生活が伝わるような下絵を描こう
- 3 単元の目標

- (1) 楽しい学校生活の場面を考え、下絵に表す過程を楽しむ。
- (2) 主題を焦点化し、伝えたいことを効果的に表すための発想や構想を深めることができる。
- (3) 発想や構想をもとに効果的にラフスケッチや下絵に表すことができる。
- (4) 自分や友人の作品(下絵)を鑑賞し、よさや工夫しているところを感じ取り味わうことができる。

4 題材設定の理由

(1) 題材について

学習指導要領解説図画工作編には、内容の取扱いと指導上の配慮事項の(2)で版に表す経験や土を焼成して表す経験ができるようにすることとある。版に表す活動は様々なものがあるが、児童が昨年度経験した木版画を今回も扱う。

木版画の特徴は、反転して写る、同じものを何枚も写し取ることができる、版ならではの表現効果がある等いくつか挙げられるが、木版画では手で描くような複雑で微妙なタッチやトーンは表せない。彫刻刀で彫った感じをそのまま活かす方が、木版画独特の表現として効果的である。そこで下絵は彫りやすいようにある程度単純化する必要がある。その際には表したいことがより明確に伝わるように強調したり省略したりして下絵を描くことが大事になってくるので、木版画の特性を活かせるように発想や構想させたい。また、強調と省略は、木版画のみならず、様々な絵を描く場面でも活かせることから、ワークを通してしっかり学ばせたい。

今回は題材名を、「楽しい学校生活を伝えよう」とすることで、自分が楽しいと感じる学校生活の場面を木版画で第三者に伝えるという目的を明確にした。このことにより、作品が自己満足・自己完結で終わるのではなく、見る人に自分の思いや意図が伝わるように考えて作品にする必要があることになり、特に下絵の際の発想や構想の能力が求められることになる。

これらのことから、本題材は、作品を作る過程で児童一人ひとりが自分の思いや意図を明確にし、特に下絵の段階では、発想や構想の能力を育むことができる題材であると考ええる。

(2) 児童について

事前に実施した図工に関するアンケートでは、本学級の児童の87%が図工の時間が楽しいと回答し、4年生で初めて経験した木版画については、92%の児童が「楽しい」「まあまあ楽しい」と答えていて、図工の授業や木版画への関心の高さがうかがえる。木版画の過程については、65%の児童が木版画の彫りの過程が楽しいと感じている中、それ以上の70%の児童が難しいとも感じている。これは木版画を彫る際に使う彫刻刀が大きな要因であると考えられる。サクサクと版木を彫る感触や音が心地よいという好意的な意見がある反面、気をつけないと手を切ってしまうなどの安全面に関する意見や、細かい所を思うように彫れないなどと彫刻刀の扱いについての意見があり、これらの理由から彫りの過程に難しさを感じているようである。また、下絵の過程が「楽しい」と回答した児童は39%、「難しい」と回答した児童は35%だったことから、児童にとって木版画は、下絵の過程より、彫刻刀という道具を使う彫りの過程の印象が強いと考えられる。

本学級の特徴の一つとして、絵を描くことが好きな児童が多いことが挙げられるが、思い通りの絵が描けるかの問いに、「描ける」「だいたい描ける」と回答した児童が78%なのに対し、絵を描くことが「得意」「やや得意」と感じている児童は52%と約半数にまで減っている。これは、ある程度自分が思っていることは描けるが、描いたものに対してうまくかけているか自信がないということの表れではないだろうか。絵を描く時に悩むことはあるかという問いにも、やはり、「どう表していいかわからない」「上手に描けない」という技能に関する回答の割合が多かった。これらの悩みの大きな原因を、アンケートと共に「楽しい学校生活」というテーマで描いてもらった児童のスケッチから考察すると、児童の創造的な技能に課題があるということよりも、絵を表す前段階での発想や構想が十分に練られていないことからきているのではないかと考える。描いたものが上手・下手というよりも、これがなぜ「楽しい学校生活」なのだろうかと見る人にとって分かりづらい・伝わりづらい絵になっているものが多々あったからである。このことから、下絵を描く意欲は保たせつつ、技術的な指導の前に、感情表現・テーマ性が伝わるようにしっかりと発想や構想することの大事さに気付かせていきたい。

(3) 指導について

発想や構想の能力を育むため、本研究では木版画の「下絵」の過程に重点を置き、下絵の過程の

中で思いや意図を明確にしていく活動を取り入れた木版画の学習を展開していく。

そこでは、木版画の下絵をすぐ描かせるのではなく、①言語活動により思いや意図を明確にさせていく、②ワーク(造形活動)により木版画の特性を理解させその表し方を練習させる、という2つの活動を展開していく。①により、絵が苦手な児童でも何をどのように描きたいという下絵のイメージは持てるであろう。そして②のワークで学習したことを下絵に描く際に活用させる。たとえ思い通りに描けなくても、児童が表したいことをどういう感じに表したいかイメージをはっきり持っていれば、教師側もよりの確なアドバイスができるのではないかと考える。実際に下絵に表す際には、思いや意図を明確にしたワークシートやラフスケッチを何度も確認させて、発想や構想したことが下絵に表れるようにさせたい。また、描くことや広げたイメージを何度も確認するため、ワークシートは丁寧な字で書かせることにも留意したい。

5 単元の評価規準

造形への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
①楽しい学校生活の場面を積極的に考えようとしている。 ②意欲的にワークに取り組んでいる。 ③木版画の下絵制作を楽しみながら意欲的に取り組んでいる。	①テーマを表すための要素を考え効果的に表そうと発想や構想している。 ②ワークを通して学んだことを活かしながら主題を焦点化し、効果的に下絵に表そうと発想や構想している。	①表したいことが伝わるように効果的にクローズアップして表している。 ②ワークを通して学んだことを活かし発想や構想したことを効果的に下絵に表している。	①友人の描いた下絵のよさや工夫しているところを感じ取っている。

6 指導計画 8時間

過程	時	主な学習内容	作業内容		学習指導の手立て	評価の観点			
			言語活動	造形活動		関	発	創	鑑
	事前	①宿題で「楽しい学校生活」の絵を描いてくる。 ②どんな楽しいことがあるか、思いつく限り書いてくる。(言葉)	1. キーワードでウェビングをする。	1. 4 B以上の鉛筆で下書き(色を付けない)					
下絵 (研究範囲)	①	1. 学習課題を知る。 ①楽しい学校生活を(～に)伝えよう。 ②趣意説明 ・なぜ版画で、この題材なのか。 ・誰に伝えるのか。 2. 主題を決める。 ①どんな場面を伝えるか ②場面の割り振り	2. 全体で話し合い、主題を決める。 ①学校生活で楽しい場面を挙げる。(ブレインストーミング) ②伝える場面を絞り込む。(児童の人数分)		・ピクトグラム の提示 ・非常口	①			
	②	1. 主題を焦点化する方法を学ぶ。【ピクトグラムによる単純化】 ①ピクトグラムを知る。 ②キーワードを使い主題を表すために必要なものを考える。 ③ピクトグラムで表す。 ④互いのピクトグラムを鑑賞する。	1. キーワードを使い、主題を効果的に表すために必ず描かないといけないものを絞りこんでいく。(ワークシート①)	1. ピクトグラムを知り作ってみる。 テーマの例 ・理科室 ・音楽室 ・保健室など	・ワークシート①を活用 ・図画工作5・6年下P37, 1・7を使用	②	①		

③	1.主題を焦点化する方法を学ぶ。【部分のクローズアップによる強調と省略】 ①3段階のクローズアップした写真を見てその効果について考える。 ②テーマに沿ってラフスケッチをする。	1.テーマを表すため、絞り込んだキーワードを更に詳しくする。 ・人→上半身○下半身× ・顔→笑っている ・花→コスモスがたくさん	1.テーマに沿って表したいことが伝わるようにクローズアップしラフスケッチする。	・3段階の写真を用意して提示。	②	①	①
④	1.主題を焦点化する。 ①キーワードで描くものを絞り込む。 2.ラフスケッチを描く。 ①これまでのワークを基にラフスケッチを描く。	1.キーワードを使い、主題を効果的に表すために必ず描かないといけないものを絞りこんでいく。(ワークシート①) 2.絞り込んだキーワードを更に詳しくする。	1.テーマに沿って表したいことが伝わるようにワークを活かしてラフスケッチを描く。	・版画の参考作品を提示。			
⑤	1.ラフスケッチを描く。 2.ラフスケッチをもとに下絵を描く。		1.ラフスケッチを描く。 2.下絵を描く。		③	②	②
⑥	1.ラフスケッチをもとに下絵を描く。		1.下絵を描く。				
⑦	1.ラフスケッチをもとに下絵を描く。		1.下絵を描く。				
⑧	1.鑑賞	1.友人の作品で、ワークで学んだことを活かして工夫しているところを感じ取る。					①

7 今後の授業展開

転写	⑨	下絵を版木に転写する
彫り	⑩～⑬	版木を彫る
刷り	⑭⑮	作品を刷る
鑑賞	⑯	掲示し鑑賞する

8 本時の指導 (5/8)

(1) 目標

◎ワークシートやラフスケッチをもとに、発想や構想したことを効果的に木版画の下絵に表すことができる。

○主題を焦点化し、効果的に下絵に表そうと発想や構想することができる。

(2) 準備

・画用紙 ・ワークシート ・参考作品 ・4Bの鉛筆

(3) 授業仮説

木版画の下絵を描く場面において、言語活動によってイメージを広げたワークシートとラフスケッチを活用することにより発想や構想が練られ、下絵が描きやすくなるであろう。

(4) 展開

過程	学習活動	教師の支援・留意点	評価
はじめ5分	1. 前時を振り返り、本時の流れを確認する。	○ワークシートとラフスケッチを活用することを説明する。	

どういう思いや意図があるのか、見る人にはかなり伝わりにくいものとなってしまった。描いた本人も、「プールは楽しい」と漠然とした思いしかなく、プールで何をしているのが楽しいのか、なぜ楽しいと思うのかなどと、深くは考えていなかったと思われる。

そこで、授業では、ウェビングの仕方を工夫し、楽しい学校生活の場面を決める発想の段階では、前の言葉から連想するものをつないでいくのではなく、前の言葉の何が楽しいのかということを考えて、場面をより限定していくようにさせた。その結果、「楽しい学校生活→休み時間→サッカー→シュートをした時」とテーマからそれずに楽しい学校生活の場面を限定することができた。次に、①自分が伝えたい場面 ②なぜそれが楽しい場面なのかその理由、③その時の気持ちが伝わるようにするために必ず描くもの、をワークシートに書かせた。このことにより、程度の差はあるものの、ほとんどの児童がなぜその場面が楽しいと思うのか自分の気持ちを明確にする事ができた。

場面と気持ちをはっきりさせた後には、必ず描くもののイメージをウェビングで広げさせた(図3-1)。それにより、表したいもののイメージがより具体的になり、どのように描けば気持ちが伝わるのか、絵に表すための構想が練られた。それをもとに、何枚かラフスケッチを描いた後できた下絵が図3-2である。ワークシートで発想や構想したことすべてが絵に表れているわけではないが、T君の思いや意図がしっかり反映され、十分に伝わってくる絵となっている。

また、「虫を観察するのが楽しい」といろいろな構図でラフスケッチを描いている中「やっぱり虫を捕っているときが楽しい」と心境が変化し、絵を変えた児童がいたが、ラフスケッチや下絵の最中にもワークシートを確認させ、何を表したかったのか、どんな風に表したいのか思いや意図を何度も確認させたことでテーマから離れた絵になることはなかった。さらに、机間指導した際に、どういう気持ちを表したいか、どんなふうに表したいかと児童に問うと「一輪車に乗って友達につかまって練習しているところ」、「ボールを打つ瞬間で、腕に力が入っている感じを表したい」などと、表したいことのより具体的なイメージが返ってきた。

これらの児童の様子から、思いや意図が明確になり、発想や構想が深まっていることを感じたのと同時に、言語活動の重要性や、発想や構想の時間を確保することの重要性を改めて感じた。

(2) 造形活動による木版画の特性の理解と主題の焦点化の検証

ピクトグラム作成では、表すものを単純化していく過程で、表したいことを伝えるための大事な要素が何かを見分ける力が育まれると考える。言語活動と共に取り組むことで、思いや意図をはっきりさせながら、単純ではあっても見る人に意図が伝わる作品にするにはどう表せばいいのかを考えるトレーニングになった。

また、クローズアップのワークを通して、児童は、クローズアップには表したいものを強調する効果があるということと、その程度により見る人に伝わり方がかわるということを学び、それを木版画の下絵に生かすことができた。

授業前に「楽しい学校生活」をテーマに宿題で描かせたスケッチで、Sさんはソフトバレーの場面を選んだのだが、クローズアップをしすぎて、「ボールと手」という何が楽しいのか見る人には分からない絵を描いた(図4-1)。それが、ピクトグラム作成、クローズアップの学習・言語活動・ラフスケッチを経てできた下絵が図4-2である。表情・周囲の状況も加わり、「自分がアタックをしているところが楽しい」と書いていたように、自分の気持ちが伝わるように効果的にクローズアップしている。

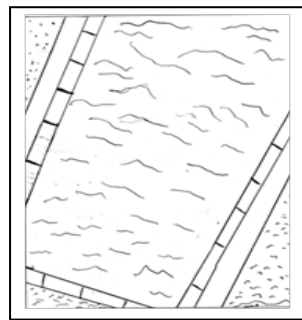


図2-2 プール(宿題)

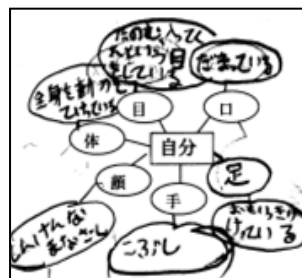


図3-1 ウェビングの一部



図3-2 下絵



図4-1 ソフトバレー(宿題)

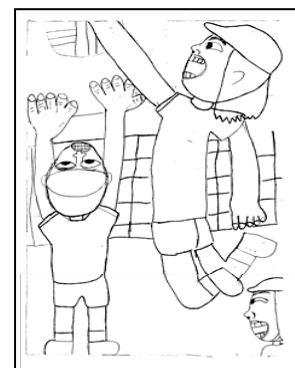


図4-2 下絵

また、「サッカーでキーパーがうまいと言われるから楽しい」と、キーパーをしている自分を描いたJ君も、事前スケッチでは人物を大きくクローズアップし周囲を省略したことで、やや分かりづらい絵になっていた(図5-1)。しかし、授業で描いた下絵では、同じテーマでも少し引いた構図にし、サッカーゴールとキッカーを描くことで、シュートした瞬間の臨場感のある絵になった。(図5-2)



図5-1 事前スケッチ

事前に描かせた児童の絵には、図4-1のように、もともと単純に描かれたものも多かったのだが、その思いや意図が伝わりにくいのがほとんどであった。しかし、ピクトグラムとクローズアップのワークの後、何を描けば表したいことが伝わるのか、大事な要素を考えてから描いたことで、多少なりとも効果的にクローズアップすることを意識した下絵や、単純に描かれていても思いや意図が伝わってくる絵が増えた。木版画の下絵は、ピクトグラムほどの単純化はしないものの、次に彫ることを考えて、小さすぎずあまり複雑でないものにしなければならない。それからすると、授業後の児童の下絵は木版画に適した絵となったと言える。

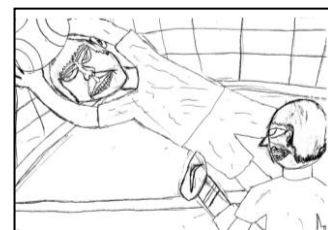


図5-2 下絵

クローズアップやピクトグラムの強調・省略や単純化という手法を活用して、表したいものが伝わるように効果的に表せたことは、ピクトグラム作成のワークと、クローズアップのワークという造形活動で学んだことを通して、主題を焦点化できたと言えるのではないかと考える。

(3) 言語活動と造形活動の関連と発想や構想の能力の高まり

今回、言語活動で思いや意図を明確にし、ピクトグラム作成とクローズアップの造形活動で学んだことを基に木版画の下絵を描くという学習活動の流れであったが、やはり、言語活動なしで造形活動の手法を活用しようとしてもうまくいかなかったと考える。思いや意図が漠然としたままでは、表したいことを効果的にクローズアップや単純化をして主題を焦点化することは難しいからである。おそらく、授業前の宿題の絵(図6-1)のように、多くの児童がテーマからそれた絵や、何を表したいのか意図がわかりにくい絵を描いたに違いない。また、その逆も同じで、言語活動のみで造形活動で学んだ手法を知らずに下絵に入ると、思いや意図は明確にすることができても、それを具体的に表す際に効果的に表すのが難しくなる。効果的なクローズアップや単純化を分かっている使用のと、分からずに偶然そうなるのとでは、かかる時間も労力も違うからである。

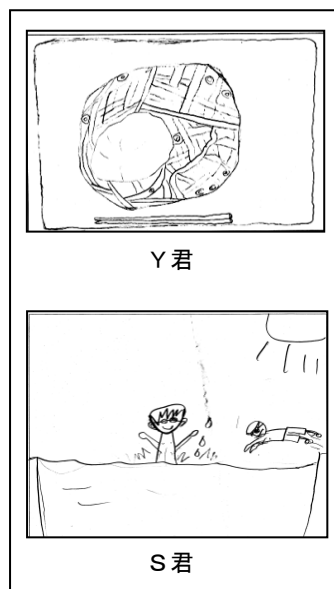


図6-1 授業前の宿題の絵



図6-2 授業後の下絵

授業前の宿題の絵(図6-1)と授業後の完成した下絵(図6-2)は、それぞれ同じ児童の絵であるが、これらを比較すると発想や構想の深まりがよくわかる。しかし、アンケートで、授業前には思い通りの絵が描けると78%の児童が答えていたが、そのうちの68%の児童が授業後には自分が考えたことを実際に絵に表すことが難しかったと答えた。S君もそのうちの一人である。S君は、思い通りの絵が描けるとして図6-1のプールで遊んでいる絵を、そして授業後には自分が考えたことを実際に絵に表すのが難しかったと答え図6-2の絵を完成させた。授業前の絵では、プールで遊んでいるところと場面は決まったものの、発想や構想をほとんど練らずに描いたものと推測される。S君の考えている「思い通りに絵が描ける」とは、頭に浮かんだことをそのまま描き連ねるということなのだろう。それに対して授業で描いた下絵は、どうい

う気持ちを表すために、何をどう描こうかなどと発想や構想を深めて描いたものである。発想や構想が深まった分、それを具体的に表すには相応の創造的な技能が必要になる。S君は、自分のイメージ通りになるようにラフスケッチを何枚も描いて、苦心してようやく下絵を仕上げた。その結果、絵のクオリティは格段に良くなっているのにも関わらず、S君は自分が考えたことを実際に絵に表すのが難しかったと答えたのだと考える。

また、授業後のアンケートで、児童の74%が「表したいもののイメージの広げ方が分かった」と答え、70%が「何をどう描けば伝わりやすいか考えるようになった」、65%が「構図をいろいろ考えることができた」、61%が「描くものを整理することができた」「自分の気持ちをはっきりさせる事ができた」と答えた(図7-1)。この結果からも、多くの児童が授業を通して発想や構想を深めたことが分かる。そして、難しかったこととして、74%の児童が「自分が考えたことを実際に絵に表すこと」、61%が「顔の描き方」、57%が「構図をいろいろ考えること」、43%が「何をどう描けば伝わりやすいか考えること」「クローズアップで強調すること」と答えた(図7-2)。これらのアンケートの結果から、発想や構想の深まりと技能に関する難しさを児童が感じていることが分かる。しかし、事前(図6-1)と事後(図6-2)の絵を見比べれば分かるように、言語活動と造形活動が相互に効果的に作用した結果、難しいと感じながらも多くの児童は効果的にクローズアップや単純化をして主題を焦点化することができ、発想や構想を深めて木版画に適したこれらの下絵を描くことができたと言えるだろう。

これまで述べてきたことから、木版画の下絵の過程において、ピクトグラムとクローズアップのワーク(造形活動)と表すことを整理する言語活動をしたことで思いや意図が明確になり、下絵に効果的に表すための構想が深められ、発想や構想の能力が高まったと考える。

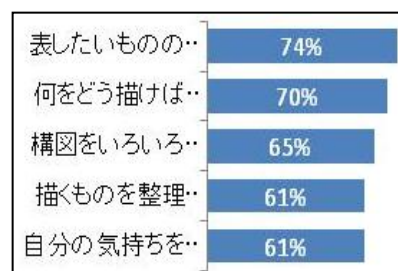


図7-1 ためになったこと



図7-2 難しかったこと

IV まとめと今後の課題

1 成果

- (1) 言語活動を取り入れることで、描画の前に思いや意図を明確にすることができた。また、描画の最中には、自分や友達作品からの新たな気づきを言語活動によって発想や構想に活かすことができた。
- (2) 思いや意図を明確にし、造形活動で学んだ単純化やクローズアップを効果的に活用することで下絵を描くための発想や構想が深まった。
- (3) 言語活動と造形活動を関連付けて活用することで、主題を焦点化することができ、表したいことを効果的に木版画の下絵に表すことができた。

2 課題

- (1) 版画に限らず全ての単元の中で、思いや意図を明確にし、発想や構想を練る時間を設定する必要性を感じるが、各単元の計画時数の中にどう位置付けていくかが課題である。
- (2) 発想や構想の深まりに伴い、創造的な技能の欲求も深まった児童がいた。このことから、その学年に見合った創造的な技能を身につけさせる必要があると感じた。また、児童の描画力に相当な個人差があったことから、各学年で身につけさせるべき事項を整理し、その確実な習得にむけて校内で共通理解を図ることも大事である。
- (3) 十分な時数を確保したため木版画の単元としては深まったが、図画工作科の年間授業時数の中で、木版画とその他の単元との時数のバランスをとる必要がある。

〈主な参考文献〉

- 滝口泰正 1973 『絵で一番だいじなことは・・・』 文化書房博文社
 藤江充・三澤一実 2008 『学習指導要領の解説と展開 図画工作編』 教育出版
 向山洋一・TOSS 編集委員会 2001 『日本教育技術方法大系第11巻 図画工作科指導大事典』 明治図書